Mt. APOI GEOPARK NEWS LETTER　Vol.9

ふるさとジオ塾通信 第9号

塾生のみなさん、こんにちは。

前回講座のエンルム岬での磯の生きもの観察は、ちょっと霧が濃くやや肌寒い気温ではありましたが、雨にたたられることもなく無事に実施できました。それにしても驚いたのが、観察された生きものの種類の多さと講師の高橋誼さんの豊富な知識です。磯をちょっと歩くだけで次から次へと新しい生きものが出現し、メモを取る手は休む間もありません。そして、一見すると同じ種類にしか見えない海藻でも、高橋さんの解説を聞きながら見直すとあら不思議、ちゃんと違いが見えてきたりします。今回観察できた生きものはおさらいのコーナーでリストアップしておきましたので、図書館の図鑑などを活用しながら、前回講座に参加された方は復習を、そして参加できなかった方々は次のチャンスに向けて予習をしてみてはいかがでしょうか。

第４回（７月）講座のご案内

第４回講座はバスツアー「アポイ岳ジオパークジオサイト巡り①」です。様似海岸の風光明媚な風景をつくる親子岩などの奇岩類や日高耶馬溪の断崖絶壁を巡りながら、それはいつごろ、どうやってできたのか？　また、それら奇岩類や崖の存在と、この様似というまちの歴史との意外な関係とはなにか？　などについて楽しく学びたいと思います。講師には元様似郷土館職員の羽立豊春さんをお迎えします。お楽しみに！

【第４回講座　バスツアー「ジオサイト巡り①」】

１．開催日：平成２３年７月３１日（日）

２．参加申し込み：*事前の申し込みが必要*です。*７月２７日（水）まで*にお申し込みください。
バスの定員の都合上、予定人数に達し次第受付を締め切ります。
申込先：電話 36-2120（アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局：役場商工観光課内）

３．スケジュール
8:50　中央公民館前集合
9:00～11:50　バスツアー
12:00　中央公民館前解散

４．持ってくる物
アポイ岳ジオパークガイドブック　筆記用具

５．雨天等の場合：よほどの悪天候でない限り実施します。

海藻と海草？ 字が違うだけじゃないんです！　ジオコラム ⑦

前回の講座はエンルム岬の磯の生きものがテーマでした。ところで、当日も観察できた海藻と海草、どちらも「かいそう」と読み、海に生えるものですが、まったくの別物だって知っていましたか？（次頁以降の緑藻類・褐藻類・紅藻類が海藻、種子植物が海草）

「海藻」とは海中にはえる藻類のことで、これらは花を咲かせず、種ではなく胞子というもので子孫を増やします。藻類では根・茎・葉の区別がなく、根のように見える部分は栄養吸収のための部位ではなく、岩にくっつくためのものです。様似の特産品でもある昆布やフノリ、マツモをはじめ、日本の食卓におなじみの海苔、ワカメ、ヒジキなどは全て海藻類です。日本にはなんと約 1400 種類もの海藻類があるそうです。

一方、「海草」は、花を咲かせ種子を作って繁殖します。海草には根・茎・葉の区別があります。ごく一部に食べられるものもありますが、海草の多くは食べてもおいしくなく、それどころか生で食べると中毒を起こし、死をも招くものがあるとか。こちらはずっと少なく、日本国内で 20 種程度しか知られていません。

読みも同じく１字違いなのに、大きな違いのある海藻と海草の話でした。

第３回講座のおさらい

「様似の磯の生きものを観察しよう！」

講師：高橋誼さん（植物研究家）

今みなさんが立っているこのエンルム岬の磯、こういう波に削られてできた平らなところを波食棚（はしょくだな）といいます。波がここを削ったのは、約 5 千年ほど前の縄文海進（じょうもんかいしん）のころでしょうか。

波食棚

このような磯は、天気が良いとがんがん照らされて水分は蒸発し、気温も上がります。環境的に生物がすむには非常に厳しい場所になっています。環境が厳しければ厳しいほど、生物というのはそれに耐えていくために長い年月をかけて生き方や体のつくりを変えていきます。それを進化といいます。磯というのは、動物や植物の進化の舞台になっていると言われています。その進化の舞台であるこのエンルム岬の波食棚で、どのような動物あるいは植物に出会えるか、今日はみなさんと子どもの頃を思い出しながらふるさとの磯の自然と親しみ、感動を味わいたいと思っています。

エゾヤスリヒザラガイとコモチイソギンチャ

※以下は当日観察できた生きものと、高橋さんの解説の要約です。

１．動物

【腔腸動物】

コモチイソギンチャク：赤や茶色、黒など様々な色のものがある（多彩現象）。目を持たないこのイソギンチャクが多彩現象を持つ理由については学者が非常に悩んでいて、結論は出ていない。

ヒオドシイソギンチャク：指で押すと潮を吹く。

キタミズクラゲ

【節足動物】

ケフサイソガニ

イソガニ：磯に住んでいるカニ

ケフサイソガニ：ハサミにふさふさした毛がついている。

ヨツハモガニ：頭にとげのようなものが 4 つついているのでヨツハ、藻があるようなところにすんでいるのでモガニ。

オホーツクヘラムシ：ヘラ型の虫。緑色、黒っぽいもの、茶色っぽいものと同じ種類なのに体の色が違う（多彩現象）。これは、自分の体を隠ぺいするのに役立っていると言われている。

イワフジツボ：イワフジツボは磯の他の動物に食べられるのが怖いので、少し高い場所に付いている。

チシマイワフジツボ：イワフジツボより大きい

テナガホンヤドカリ：体の成長に応じて次々と宿（巻貝の殻）を変える。当日はチヂミボラとヒラガンガラの宿を確認。

ニッポンモバヨコエビ

ニッポンモバヨコエビ：日本の藻場にいる横に泳ぐエビ。日本にはヨコエビの仲間が 170 種類いるが、その半分しか名前がついていない。

フタアシモズク：足が２つ目立っていて藻にくっついていることからきた名前。

【軟体動物】

スルメイカ

ミズダコ

エゾヤスリヒザラガイ：赤っぽいヒザラガイ

ヒザラガイ：膝を曲げた感じに見えるので付いた名前。

アオガイ

アヤボラ

アヤボラ：皆さんご存知の毛が生えているケツブ。昔は食に困ってもこれは絶対に食べなかったが、世の中変わるもので、今は大量に採って食べている。

ウチダベッコウタマガイ：ウチダは北大の学者の名前から。

クロタマキビガイ：キビはトウモロコシのこと。この貝が磯にぎっしりついている様子がトウモロコシを連想させることから。イワフジツボより臆病なのでより高い場所に付くが、そのかわりイワフジツボよりも乾燥に強い。
ヒメエゾボラ：かつては函館や札幌の路上の屋台でも出していた巻き貝。
ヒレガイ：貝殻のふちがひれのように立ち上がっている、チヂミボラの仲間。
アサリ：貝殻の表面にいろいろな模様がついているが、貝殻の内側にはほのかに紫色の模様がある。これが正真正銘のアサリの証拠。ないのはヌノメアサリ。
イガイ：以外にもこの貝の名前の由来は分からない（笑）。
エゾヒバリガイ：貝の形を鳥のヒバリの頭に見立てた名前。この貝の大きなものには、小さなカニが隠れている場合がある。
マガキ：これは本当のカキという意味でマガキという名前。今の季節は夏季（笑）。マガキの尻についているふわふわしたものは海綿、これを真似して作ったのがスポンジ。
ムラサキイガイ：イガイより小さい。
【棘皮動物】
キタムラサキウニ：７月中旬を過ぎる頃、頭の上の穴から黄色い液体を出しているのがメス、白い液体を出しているのがオス。
エゾバフンウニ：オスメスの見分け方はエゾムラサキウニと同じ。
イトマキヒトデ：漁師の網を作る糸巻きに似ているため。実際に糸巻にも使っていた。
コヒトデ：大人なのにこのサイズ（3cm ほど）なのでこの名前。
ヒトデ：ヒトデは漢字で海の星と書くが、人手とも。5 本あって人の手に似ているからか。
【脊椎動物】
ギスカジカ：とげっぽくギスギスしているのでギス。
ゴマギンポ：エゾガジとも。小さいうちは磯で生活するが、10cm を超えると磯から出て深いところへ行く、という法律がこの魚にはあるんです（笑）。
アイナメ：この日佐々木課長が釣ったアイナメは 56cm（自己新記録！）もありました。

２．植物

【緑藻類】
アナアオサ：成長すると穴があく。
ウスバアオノリ：アナアオサより薄い。
シリオミドロ：胞子にしっぽがあって、泳ぐことができるので付いた名前。
ツヤナシシオグサ：シリオミドロに似るが、これにはツヤがない。
タマジュズモ：小さい玉が繋がっていて、数珠のように見える。
ボウアオノリ
【褐藻類】
ウガノモク：函館の宇賀浦湾で発見されたので付いた名前。
ウミトラノオ：トラのしっぽを想像してついた名前。
カヤモノリ
スジメ：別称ザラメ、スジメコンブ。えりも町の庶野では食べる習慣がある。
チガイソ：チガウラという本州にある地名から。若いものはワカメ代わりに食べられる。
ネバリモ：くちゃくちゃと手でもむと粘りっけがでる。三杯酢などで食用にも。

エゾヒバリガイ

イガイ

ヒトデ

コヒトデ

アイナメ

ウスバアオノリ

ウミトラノオ

ネバリモ

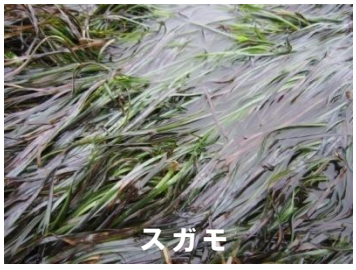
スジメ

ヒバマタ：ヒバは本州に生える木の名前。枝先が又状に分かれるのでヒバマタ。
マツモ：正しくはマツボだが、訛ってマツモに。これも陸に生えているマツを連想したもの。

【紅藻類】
アカバ：しわよってかたい海藻。
イソムラサキ：この海藻を押し葉標本にすると紙が赤紫色になるので付いた名前。
イボノリ：クロハギンナンソウなどの仲間。
ウシケノリ
ウラソゾ：水の穏やかな海岸を指すウラ（浦）になっている磯に生えるソゾ（磯の海藻）。北海道のは大きくて 7～8 月の特に大きくものはオオソゾなどと呼ばれる。

クロハギンナンソウ：エゾツノマタともいう。若いものは食用にもなる。

コスジフシツナギ
ダルス：スコットランドあたりの呼び名そのままの名前。北欧では生サラダにして食べるそう。
ピリヒバ：本州のヒバに似ていることからの名前。これが多すぎるといわゆる磯焼けになるが、石灰分を多く含んでいるので、個人的には二酸化炭素吸収に役立っているのではないかと思っている。
フクロフノリ：布を張るのに使った海藻なので、漢字で書くと布海苔。夏になると袋状になることからフクロフノリ。
フジマツモ：名前はカラマツ（別称フジマツ）に似ていることから。第 2 次世界大戦中はこれを焼いた灰を爆薬の原料に使っていた。
ヘラリュウモン：へら型のリュウモンソウ。平取では食べる習慣もあるそう。



【種子植物】
スガモ：陸上のスゲに似ているので付いた名前。これはいったん陸上に進化して上がっていったが、他の植物との競争に負けて海に里帰りしてきた。

【まとめ】
今日確認できた生きものは 62 種だが、もっと時間をかけて探せば 100 種類以上が見つかると思います。今日帰りましたら、記憶の薄れないうちに図鑑を見ながら復習していただきたいと思います。それから、お子さんやお孫さんと一緒にこのエンルム岬に来ていただきたい。観察の 1 番の目的は名前を覚えることよりも動植物の生き方を見てひとつでもふたつでも感動することです。感動したことが記憶として残って自然を大切にする、子どもの場合は感性を養うことに繋がる。ということで、どうかまた今度は家族と来て磯の動植物と戯れてください。

今後の講座（予定含む）				
	第 4 回講座	7 月 31 日（日）	野外	バスでジオサイト（みどころ）を巡ります
	第 5 回講座	8 月 21 日（日）	野外	船に乗って沖から様似の地形やまちなみをながめます
	第 6 回講座	9 月 11 日（日）	野外	バスでジオサイト（みどころ）を巡ります

編集後記：7 月に入っていよいよ夏本番。様似の夏の風物詩と言えば、地質巡検もその一つ。地質巡検とは、地表に姿を現している地層や岩石を実際に見に行く野外実習のこと。貴重な幌満かんらん岩体などが観察できる様似は、地質巡検のメッカでもあります。今年の夏も全国そして世界各地から研究者や学生たちが様似に来てくれることでしょう。

アポイ岳ジオパーク　ふるさとジオ塾通信 Vol.9
発行：2011 年 7 月
発行元：〒058-8501　様似郡様似町大通 1 丁目 21
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局
（様似町役場商工観光課）
電話：0146-36-2120　FAX：0146-36-2662
E-mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp
ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/